

自然保護を訴える「紙の鶴」の作品



京都のお寺で瞑想中のウルバンさん



梅の花を鑑賞する



書道に夢中になって教室へ通う

外国人として生きる

心を引き付けて離さない町

アグネシカ・マジエツツ

総合研究大学院大学文化科学研究科

京都のスタジオで

「どうぞお入りください。お待ちしてました」という優しい声にしがいながら入ると、部屋は想像していた以上に広く、一部ガラス張りになった天井からは、日が射し込んでいた。その光が真新しい白い壁に反射して、京都の一角にあるスタジオの一室をひときわ明るく照らし出している。童顔で小柄な彼女との挨拶もそこに、ふと壁に目をやると、一枚の大きな写真が掛かっている。彼女はおもむろに話し始めた。「これはわたしが作った『紙の鶴』というタイトルの作品です。琵琶湖に群生しているアシのなかで、小魚などを折り紙の鶴が探している光景ですが」。そして、ウルバンさんは、日本に来たきっかけや自分の芸術家としての仕事などについて語ってくれた。

京都への道

ウルバン・ジャネタさんはポーランドの出身。ポーランドは音楽家のショパンが生まれた国でもある。最近テレビで女子バレーボールのチームが何回も来日し、スポーツの国としても知られるようになったが、ウルバンさんは、じつは音楽にもスポーツにも幼いころから、興味はあまりなかったという。しかし、子どものころから、何かを創作したい、という強い願望があった。芸術家になりたいかっただのである。そのため、芸術の都といわれるパリの芸術大学で勉強

強することが夢であった。

中学校のとき、本格的に絵画と彫刻のレッスンを開始した。高校に入ってから、参加した芸術活動の合宿である日、先生に、ウルバンさんの心のなかに日本的センスがある、と言われた。そのときは、特に気にとめなかったが、その後もいろいろな先生から、同じような意見を聞くようになった。それとともに、次第にウルバンさんは、日本芸術とはどんなものか、自分の作品はどこが日本の作品に似ているのか、と考えるようになった。これが、日本芸術に興味をもつようになった理由であったと思っている。

それを契機に日本に関するアルバムを見たり、本を読んだりするようになった。しかし、フランスの大学の入学試験をひかえていたので、フランス語と入学試験のための準備に専心した。その甲斐もあり、希望の大学に合格した彼女は、念願のパリですばらしい彫刻、絵画、ファッショデザインなどに触れまなぶことができた。暇なときには、モンマルトルの広場によく出かけた。そこには彼女のよう、あらゆる環境のなかで、さまざまなことに挑もうとする留学生が世界中から集まっていた。そのなかで会ったのが、一人の日本人女学生であった。彼女とは心の通ずる友達になった。異文化の差異を全然感ずることはなかったという。

その友達は、大学入試のため退いていた日本文化への興味を突然引き戻してくれた。ウルバンさんは、彼女をおし日本

の文化をどんどん吸収していった。それが刺激となって実際に日本に行きたいという気持ちはとめどなくわいてきた。そんなウルバンさんに、ある日突然、日本に行くチャンスが訪れた。日本人の友人が結婚することになり、彼女に同行して日本に行くことになったのである。滞在は二週間。とても印象的な滞在だった。京都に初めて来たのに、故郷に戻ってきたような印象を受けた。忘れられないのが、建仁寺の線香の香りで、なんともいえず懐かしく感じた。京都にずっといたいという気持ちをいだきながら、後ろ髪をひかれる思いで、パリの大学に戻った。

大学を卒業したウルバンさんは、ファッショブランドであるニナ・リッチに勤め、精力的に仕事をこなした。ファッショシヨール、ファッショデザインなどで、忙しい毎日を通しながらも、京都に行きたいという気持ちは消えるどころか、増すばかりであった。そして迷った挙げ句、ヨーロッパでの生活をやめて、日本の芸術の都に行くことを決心した。「日本行きの飛行機に乗ったとき、大変な不安は禁じえませんでした。しかし、それ以上に、鳥かごから解放された鳥の気分でした」とウルバンさんは当時の自分の気持ちをのべる。

外国人芸術家の夢

ウルバンさん自身は、芸術には人間の価値観を揺さぶる力がある、と思ってい

る。だから、芸術は社会問題や環境問題に、大きな役割を果たすことができる。ウルバンさんが作った「紙の鶴」という作品は環境問題への関心を高めようとしている作品である。自然から減少しつつある鶴の姿を折り紙で表現することで、自然を取り戻す必要性を訴える。人間が水を汚染した結果、自然破壊を招いた。再び人間が自然と共存するためには、積極的にエコロジー運動をすすめるべきではない。実物大の折り紙の鶴がこの地球に幸福をもたらすことを確信したという。

ウルバンさんのもうひとつの信念、それは芸術にはもうひとつの目的がある、ということである。それは芸術が現実から離脱して、純粹な美を追求できることである。聴衆や観衆に「なんと美しいことよ」とため息をつかせる働きをする。美との出会いは人間のこころを清める、とウルバンさんは言う。

ウルバンさんにとって、京都は芸術作品でもある。「京都は、長い歴史をもつ町で、素晴らしい文化財や芸術品が多いです。散歩したり、仕事をするあいだも、時代と芸術のカリスマにいつも浸っています。京都に住みたい夢を捨てないで、来日できて、本当に良かったと思います。ウルバンさんは、いろいろな芸術活動にかかわりながら、最近、伝統的な日本の衣装と模様に興味をもつようになった。芸術家として、この伝統衣装の素晴らしさを世界に伝える夢は膨らむばかりである。